

一般講演 午前の部 1

開始時間	第1会場		第2会場	
	講演番号	演題・発表者・所属・要旨	講演番号	演題・発表者・所属・要旨
10:00	1	<p>バーミキュライトの NaCl 濃度に対するオオムギ幼植物の成長反応の品種間差 平沢 正<sup>1)</sup>・佐藤好亮<sup>*1)</sup>・山崎由紀子<sup>1)</sup>・武田和義<sup>2)</sup>・大川泰一郎<sup>1)</sup> (<sup>1)</sup>東京農工大学大学院農学教育部,<sup>2)</sup>岡山大学資源生物科学研究所) 個体成長速度(PGR)は NaCl 濃度が増すと減少したが、NaCl 濃度が 100mM と 200mM の時には PGR の減少率には同じ傾向の品種間差があった。</p>	16	<p>多数試料の分析を目的としたチャ葉中カテキン類の抽出方法 武弓利雄<sup>*</sup>・山ノ内宏昭・吉岡照高 (農業生物資源研究所) チャ葉中カテキン類の成分分析において、多数試料の分析を想定した成分抽出方法の最適化を検討した。作業効率の向上と、環境負荷低減を主体とした条件確立を行った。</p>
10:15	2	<p>栽植様式が湛水直播水稻個体群の受光率と吸光係数に及ぼす影響 三王裕見子<sup>*</sup>・Raquel P. Oclarit・大川泰一郎・本林 隆・平沢 正 (東京農工大学大学院農学教育部) 1株1本立てで株が正方形で密に配置された水稻は、分けつ期は茎数の増加と個体群受光率が大きく、さらに登熟期には、個体群吸光係数が小さい。</p>	17	<p>サツマイモ蒸切干の硬度・糖度等品質特性における加工時乾燥過程での経持変化 蔵之内利和<sup>*1)</sup>・中村善行<sup>1)</sup>・田宮誠司<sup>2)</sup>・中谷 誠<sup>1)</sup> (<sup>1)</sup>農業・生物系特定産業技術研究機構作物研究所,<sup>2)</sup>農林水産省) 蒸煮直後の蒸しモの性状から蒸切干の性状を予測することが、多くの形質で可能であると考えられる。蒸切干の硬度と糖度との間に負の相関関係が見られた。</p>
10:30	3	<p>プール育苗及び晩植における水稻育苗箱全量基肥栽培の検討(第4報) 高橋行継<sup>*1), 2)</sup>・吉田智彦<sup>3)</sup> (<sup>1)</sup>群馬県西部農業総合事務所,<sup>2)</sup>東京農工大学,<sup>3)</sup>宇都宮大学) プール育苗、晩植条件下での水稻箱全量基肥法の適応性について育苗を中心に検討した。本年は箱全量基肥でも目立った苗の徒長はなかった。播種量を 150 g にすることでマット強度の向上が可能である。砂状ようりん覆土は生育むらが大きく、マット強度も低下し実用性は低かった。</p>	18	<p>水稻白未熟粒発生に及ぼす風の影響 大谷和彦<sup>*</sup>・藤井真弓・青木純子・高齋光延 (栃木県農業試験場) 高温と風による水分ストレスによって、乳・心白粒が発生した。出穂期の葉色が淡く、また粗植の方が白未熟粒率が高まった。白未熟粒発生には、品種間差が認められた。</p>
10:45	4	<p>米糠ペレットを使用した水稻栽培の成立条件 倉井耕一<sup>*1)</sup>・臼井和夫<sup>2)</sup>・平山順一<sup>2)</sup> (<sup>1)</sup>栃木県農業大学校,<sup>2)</sup>前栃木県農業大学校) 米糠ペレットを使用する場合は、除草効果の点で深水にする、欠株を少なくする点で中苗を使用する、ことが必要である。</p>	19	<p>収穫時期と乾燥方法が酒造好適米品種「総の舞」の碎米と吸水時の割れに及ぼす影響 太田和也<sup>*2)</sup>・星野徹也<sup>3)</sup>・小山 豊<sup>1)</sup> (<sup>1)</sup>千葉県農業総合研究センター,<sup>2)</sup>君津農林振興センター,<sup>3)</sup>千葉県産業支援技術研究所) 酒造好適米品種「総の舞」において碎米や浸漬時の割れを少なくするためには、収穫は帯緑色初歩合 15%の時にを行うこと、及び急激な乾燥や過乾燥を避けることが重要である。</p>

一般講演 午前の部2

開始時間	第1会場		第2会場	
	講演番号	演題・発表者・所属・要旨	講演番号	演題・発表者・所属・要旨
11:00	5	<p>水稲有機栽培における米ぬか施用の除草効果と水稲の生育収量 朝妻英治*・前田忠信 (宇都宮大学農学部附属農場) 米ぬか田面施用による、水稲初期生育への影響は見られず、窒素の供給が示唆された。雑草抑制効果は不安定である事が示唆された。</p>	20	<p>2003年度の宮城県産冷害水稲「あきたこまち」におけるアミロプラストの増殖異常 平田さなえ<sup>1</sup>・篠木 佑・松田智明・新田洋司 (茨城大学農学部) 冷害により著しく減収した水稲の胚乳構造をSEM観察し、アミロプラストの多様な増殖異常の出現を明らかにした。</p>
11:15	6	<p>湛水直播栽培における播種量の違いがホールクロップサイレージ用水稲新系統「奥羽飼387号」の生育に及ぼす影響 石川哲也<sup>1)</sup>・三枝貴代<sup>1)</sup>・石田元彦<sup>1)</sup>・阿部 薫<sup>2)</sup> (<sup>1)</sup>中央農業総合研究センター,<sup>2)</sup>農業環境技術研究所) 冬作後に施肥量一定で湛水直播栽培したWCS用水稲「奥羽飼387号」は、苗立ち数が約50本m<sup>2</sup>以上になると、穂数や黄熟期地際刈り乾物収量がほぼ一定になった。</p>	21	<p>Windowsによる作物品種の家系分析用Prologプログラムの作成 吉田智彦 (宇都宮大学) 作物品種の家系分析用データベースやプログラムをWindows上のPrologで作動させた。近交、近縁係数計算などがMS-DOS版Prologと同様にできた。</p>
11:30	7	<p>ホールクロップサイレージ用水稲の麦間不耕起直播栽培法 大岡直人*・重松 統・上野敏昭・新井 守 (埼玉県農林総合研究センター) 稲麦二毛作地帯では、飼料イネ生産の増加にともない麦から水稲への切り替え時の作業競争を軽減する技術が求められている。このため、麦立毛間中に水稲を播種する麦間不耕起直播技術によるホールクロップサイレージ用水稲の栽培法を確立した。</p>	22	<p>Effects of temperature and seed selection by specific gravity on germination and seedling growth in Touki (<i>Angelica acutiloba</i> Kitagawa) Hiroshi Nojima, Toru Tashiro and Ninh Thi Phip* (Faculty of Horticulture, Chiba University) トウキ種子の発芽温度および種子充実度と初期生育との関係について検討した。発芽は20で最も高い発芽率が得られた。また、充実度の良好な種子ほど、根の肥大が優れていることが明らかにされた。</p>
11:45	8	<p>温暖地低地水田における無中耕無培土を前提とした「フクユタカ」の好適な播種期と栽植密度 在原克之*・小山 豊 (千葉県農業総合研究センター) 温暖地の低地水田で「フクユタカ」を栽培する場合、播種期が早いほど、栽植密度が高いほど倒伏程度は大きくなることから、無中耕無培土栽培で目標収量を得るには、播種期を7月上旬とし、栽植密度を20~25本/m<sup>2</sup>とすることが好適と考えられた。</p>	23	<p>食用カンナの茎頂培養に及ぼす寒天濃度および成長調節物質の影響 中村浩規*・今井 勝 (明治大学農学部) オーキシンとして、NAAよりもIAAの方が有効であった。また発根は成長調節物質の濃度比が重要であった。</p>

一般講演 午後の部 1

開始時間	第 1 会場		第 2 会場	
	講演番号	演題・発表者・所属・要旨	講演番号	演題・発表者・所属・要旨
14:45	9	<p>水稲新品種「栃木7号」の品種特性と栽培法 伊澤由行*・山口正篤・池田二郎 (栃木県農業試験場)</p> <p>水稲新品種「栃木7号」の品種特性を把握し、早植栽培における栽培法と診断基準を策定した。</p>	24	<p>コムギ2品種における根原基形成の比較 鈴木祐太*・新田洋司・松田智明 (茨城大学農学部)</p> <p>コムギ主茎における根原基の形成部位、数および太さ、またそれらと各種維管束の走向との関係などの特徴が2品種に共通して認められた。</p>
15:00	10	<p>醤油用小麦「タマイズミ」の高タンパク質化安定栽培法 青沼伸一・池田二郎・伊澤由行・山口正篤・湯澤正明 (栃木県農業試験場)</p> <p>醤油用小麦「タマイズミ」の粗タンパク質含量を上げるには、栽培圃場は水田よりも畑、出穂期後10日の追肥、肥効調節型肥料が有効であった。</p>	25	<p>水稲における移植時の植付深度の違いが冠根の原基形成および出現におよぼす影響 新田洋司・緑川純子*・本田 舞・松田智明 (茨城大学農学部)</p> <p>水稲の移植時の深植えにより茎が長くなり、冠根の原基数・出現数が増えることが明らかになった。またこれらの増加は茎の頂端側の部分で顕著であった。</p>
15:15	11	<p>小麦子実灰分、容積重に及ぼす播種期と窒素追肥の影響 渡邊好昭*・金子成延・中村信吾・蝶野真喜子・安部史高 (農業・生物系特定産業技術研究機構作物研究所)</p> <p>小麦の子実灰分、容積重に及ぼす播種期、窒素追肥の影響を検討し、晩播により灰分が増加して品質が低下することが明らかとなった。</p>	26	<p>水稲の乾物生産に及ぼすオゾンおよび二酸化炭素の濃度の影響 石王俊成*・今井 勝 (明治大学農学部)</p> <p>高CO<sub>2</sub>環境がO<sub>3</sub>による障害から水稲の同化器官を保護したために、正常な乾物生産が行われた。</p>
15:30	12	<p>中国乾燥地における多収ダイズの受光量、エネルギー利用効率 磯田昭弘<sup>1)</sup>・松本俊輔*<sup>1)</sup>・王培武<sup>2)</sup> (<sup>1)</sup>千葉大学園芸学部,<sup>2)</sup>石河子中亜干旱農業環境研究所)</p> <p>中国新疆で2002,2003年で高いダイズ収量を得られた。そこで、本実験では受光量、エネルギー利用率の面からダイズ多収性について検討した。</p>	27	<p>高温・高CO<sub>2</sub>条件下の水稲のガス交換特性に及ぼす播種時期の影響 岩本 見*・今井 勝 (明治大学農学部)</p> <p>温暖化条件下におけるイネのガス交換特性を調べた結果、播種時期の違いがガス交換特性に及ぼす影響は少ないと考えられた。</p>

一般講演 午後の部 2

開始時間	第1会場		第2会場	
	講演番号	演題・発表者・所属・要旨	講演番号	演題・発表者・所属・要旨
15:45	1 3	<p>中国乾燥地域におけるダイズの高収性に及ぼす根粒及び土壌の影響                      磯田昭弘<sup>1)</sup>・成谷哲<sup>*1)</sup>・松本俊輔<sup>1)</sup>・王培武<sup>2)</sup>・李治遠<sup>2)</sup>・毛洪霞<sup>2)</sup>                      ( <sup>1)</sup>千葉大学園芸学部, <sup>2)</sup>石河子中亜干旱農業環境研究所 )                      中国新疆で、中国及び日本品種各1種のダイズの栽培実験を行い、収量として9000~12000kg/haと極めて高い値が得たが、根粒の影響は小さいと考えられた。</p>	2 8	<p>食用カンナのガス交換特性に及ぼす気孔および葉組織の役割                      石田義之<sup>*</sup>・今井 勝                      ( 明治大学農学部 )                      気孔は背軸面側の方が多く、開度も大きいので主に背軸面がガス交換に寄与するが、光合成は密で厚い柵状組織のある向軸面側で旺盛に行われるものと推察した。</p>
16:00	1 4	<p>緩効性窒素施肥がラッカセイの生育、収量および根粒活性に及ぼす影響                      磯田昭弘・大岩拓也<sup>*</sup>                      ( 千葉大学園芸学部 )                      開花期以降に急激に溶出するシグモイドタイプの緩効性被覆尿素は、ラッカセイの莢乾物重の増加に寄与しており、登熟期間の窒素供給が有効である可能性が認められた。</p>	2 9	<p>異なる窒素肥料条件に生育する水稲の個葉光合成速度の品種間差                      小澤智美<sup>*</sup>・大川泰一郎・平沢 正                      ( 東京農工大学大学院農学教育部 )                      圃場に生育する登熟期の水稲の葉の光合成活性に品種間差があること、そしてこのような品種間差は葉身窒素含量が等しくても認められることがわかった。</p>
16:15	1 5	<p>堆肥施用によるラッカセイの生育及び根粒の活性における品種間差異                      野島 博・安川光寿<sup>*</sup>                      ( 千葉大学園芸学部 )                      堆肥施用の土壌環境がラッカセイの生育と根粒菌活性に及ぼす影響を品種間で検討し、千葉半立がナカテユタカとジャワ13号よりも根粒形成と窒素固定能が優れていた。</p>	3 0	<p>パーミキュライトの水ポテンシャルの低下が老化過程の水稲葉身の全窒素、不溶性画分窒素、可溶性画分窒素, リブーロス-1,5-二リン酸カルキラーゼ / 柿ガナーゼ 中窒素の含量に及ぼす影響                      平沢 正・中西浩司<sup>*</sup>・大川泰一郎                      ( 東京農工大学大学院農学教育部 )                      水ポテンシャル低下により葉の全窒素含量が低下する時には、不溶性、可溶性画分と Rubisco 中の窒素量はいずれも低下したが、特に不溶性画分窒素の低下が大きかった。</p>